

## 妊娠と出生前検査の経験に関するアンケート調査 2013 (2)

——妊娠は女性にとってどのような経験か——

○明治学院大学社会学部社会学研究科 二階堂祐子  
明治学院大学社会学部 柘植あづみ

### 1 目的

本報告では、妊娠経験について詳細に尋ねた結果を、超音波検査、母体血清マーカー検査、羊水検査といった出生前検査を含めた医療との関係に焦点をあてて検討する。また、妊娠中に女性が経験する「不安」が出生前検査の利用と関連するのではないか、という仮説を立てて妊娠中の「不安」について質問し、回答者が「不安」に関連して何を記述したのか、女性がいかにそれらの「不安」に対処しているのか、その対処の結果について検討する。

### 2 方法

「妊娠と出生前検査の経験についてのアンケート調査 2013(1)」(田中・石黒)で報告したように、首都圏（都内および神奈川県）の 14 私立保育園と都内の子育て支援施設において、2013 年 7 月に施設を通して調査票を配布、郵送にて回収した。378 票（有効回収率 59.7%）を分析対象とした。本報告では、妊娠経験に関する設問への回答を、基本属性、妊娠年齢、妊娠の結果、出生前検査の受検有無等を変数として分析し、回答者が自身の妊娠経験をいかに捉えて記述しているかを検討する。自由記述の回答は、アフターコーディングし、内容分析をした。得られた結果と「2003 年調査」の結果との比較検討も行う。

### 3 結果・結論

妊娠していると感じたのは「市販の妊娠検査薬で」が最も多く、次に「月経が止まって」や「体調の変化で」など妊娠による身体変化の自覚があげられていた。一方、不妊治療中の女性のなかには自身で「感じる」前に、医療機関で診断を得て妊娠を知った人もいた。胎児の存在を初めて「感じた」きっかけには、胎動やつわりなどの身体感覚のほか、医療機関での超音波検査の経験について記述した女性が多かった。妊娠を知ったときの気持ちを「覚えていない」と回答したのは 1%以下で、ほぼすべての女性が喜びや驚きなどの感情を記憶していた。妊娠の気づき、そして妊娠中の心理的な変化は、身体的な変化だけでなく超音波検査などの医療との関わりのなかで生起していることが示された。

妊娠中の自身の身体そして胎児の状態について「不安」になったと記述した女性は約 6 割を占めた。「不安」を感じたのは、切迫流産や出血など妊娠経過に関する事、胎児の成長、胎児に障害がないか、無事に産めるかどうか、仕事の継続・両立ができるか、上の子の育児を含めた出産後の生活、医師との関係など多岐にわたった。「胎児の成長」に関しては、超音波検査によって胎児の姿を確認することが安心につながったと多くの人が記述していた。「胎児に障害がないか」どうかは、出生前検査の利用によって特定の障害については確率的あるいは確定的に知ることができるが、母体血清マーカーや羊水検査の受検を選択した回答者は「2003 年調査」と同様に 1 割程度であった。妊娠期の女性が抱く「不安」に出生前検査によって対処しようとした人は少ない、と言える。「不安」の内容は、医療によって対処可能なものばかりではなかったが、医療者が「不安」にいかに対処しようとしているのかについて、今後の検討課題とする。

付記：本研究は、科学研究費助成事業 基盤（B）（研究課題番号：25283017 研究代表者：柘植あづみ）の成果である。